

駅を出て、細いながらも延々と続く商店街を歩いていると、やがて照明は絶たれ、真っ暗な路地に店の看板の明かりだけが浮かび上がるばかりになった。おかしいな、毎日ここを通って帰っているのにこんなに暗いことがあっただろうか。五叉路に出くわして思い出す。この五叉路の一角は、鰻屋だっただけではないか。ふらふらと招き入れられ、三千八百円の特上をいつものように頼む。店主はここを廃業にして、親御さんの介護をするらしい。実に勿体無い。毎日鰻を食べさせてやればいいのに。僕はそのまま斜め前の蕎麦屋に入った。蕎麦屋はたいそう容体を崩し、息絶えるまで今日か明日かというばかりだった。少しでも長く生きてくれ。そう言ってそのまま目前に出来たパン屋でパンを買って食べる。ここも美味しいが、線路の反対側のパン屋は比べものにならないほど美味しい。早速買いに行くと、

「あら、起きられなかったのね、いいわ、全部売ってあげるよ。取っておきの惣菜パンよ、ドンケルで乾杯して」

と渡してくる。どうれ、8種ほどのパンを食べると、「玩具屋の並びのケーキ屋に向かう。カタカナの店名が別の名に代わっているが、味はまごうことなき同じ店。ワインの匂いのする洋菓子を買って食べたので満足しつつカレー屋さんにて南北インドの味を嗅ぎ飲んだ。少し歩いて外国の人たちが接客する酒場へと赴き飲酒。3杯でもうお腹いっぱいだ。気晴らしに回らない寿司屋で大トロを飲み下しシャコに甘いタレを塗ってもらって食べる。美味い。

僕はうとうと歩いて、マーケットの途中で古本屋に寄り、今どき無い形式の古本販売店で80年代の古書を買った。すると本からは文字が音となって流れ出し、僕の体を自然と動かす。踊る人形となった僕はふらふらと揺られて郵便局へ。そこはダンスでフィーバーするナウなヤングでいっぱいだった。図書館の本たちも踊りに来てはファッションのイベントを開いて撫で閉じる。ウオークインクローゼット級のファッションショーで僕も踊ると、金魚屋で売られるメダカがにこやかににはにかんできた。僕は素晴らしい気分になって、梱包され、郵送で自宅まで送られることになった。大きさの制限は郵便局長の寛大な心によって歪められ、隣のリング上のボクサーの口の中から飛んできたマウスピースが配達を促し、僕は翌日の昼には自宅に送り届けてもらったのだ。自宅の郵便受けからやっとの思いで這い出てくると、自宅を守っていた愛猫の黒猫の三日月が、満月になってフルパワーを誇示してきた。猫パンチ5回からの猫キック無限大にて僕は召され、地元を守る祟り神として人々を震え上がらせることになったのだった。

明くる朝、僕が楽しんだ我が地元商店街の店々は遙か昔に取り壊された店ばかりの、店の幻影だったことが報道され、そこで遊んだとされる僕という人物は元より何処にも居たことのない存在だということも並んで報じられていた。何処にもいない誰でもない誰かである僕を知らせてくれた報道に、生

まれ出でたことのないまま死んだ僕は感謝すべきなのかもしれず、暗黒の神として君臨できることになった現状をありがたく受け入れるべきことなのかもしれない、と思った。

あらあら、かっこ。